同窓会を思う

上石利男
（八十期）

母校福島県立安積高等学校の来年度の創立140周年、まことに慶賀に堪えません。小生の安積入学時は創立80周年でした。この径庭には驚かされるばかりです。

世に「名門」の呼び名が高い学窓は数多くありますが、われわれ一人一人が胸に手を当て、我が母校こそ、たった一度の青春を育くんでくれた紛れもなく掛け替えのない土壌であったと、おのが来し方を振り返り誇らしく思えるのは幸せなことに違いありません。

小生も安積時代を振り返れば、いまや「想えば遠くへ来たもんだ」の感を深くします。そして「自分があまりに未熟であった」「もっともっと学んでおきたかった」との慚愧の念が全身を襲うのです。

それにしても、60年の歳月はもはや振り返ることもままならない程のスピードでした。もはや遁れられない我々をとりまく環境の激変は、地球のみならず宇宙をも覆い尽くし、人間がIT工学の利便さを享受しているつもりが、あべこべにAI（人工知能）によって人間そのものが支配されてしまったかのような時代相となってしまいました。

ところで東京桑野会は、我が母校の卒業生で、首都圏在住者をメンバーとしていますが、他のあまたある同窓会同様、ここにきて大きな曲がり角に来ているようです。

我が母校に限らないことでしょうが、いずれの同窓会においても課題は大同小異で、年々参加メンバーの減少と財源の先細り化は共通の悩みとされています。これは少子化の影響や同窓会に対する卒業生の意識の変化によるもので、一朝一夕には解決の見いだせない難問です。

しかしながら、万事効率化全盛の時代にあって、生身の人間が敢えてかつての学友と「会って」「話す」機会を持てることは、何ものにも替えがたい心の財を保っていることだと思うのです。

何と云っても、同窓会は、決して効率のいいものではなく、億劫でもあり、ファジーであることこのうえない。しかしそこには「無駄の効用」とも云うべき人間社会の奥深さを読み取るべきではないでしょうか。

今の世の中、どこでも誰でも、謂われのない不条理を味わいつつ生きていると云っても言い過ぎではありません。誰しもが、順風満帆の人生を生きていることなど絵空事と云うべきでしょう。いわば誰もが傷つき孤立化して、生きづらい人生を必死に生きている「仲間」であること、そして刹那から深みへの人間交流の一歩として、かつて青春の熱と希望をたぎらせた絆を追体験することも不可能ではない契機を見いだすこともあり得ると思うのです。

まさしく、一見、無駄に思える時間と空間も、実際に共有することで誰もが主人公であり、中心者であるべきです。

――いまや同窓会に存在意義はあるか。あなたは同窓会を必要としていますか。深刻な問いがかわされるべきは、これです。

以上